郷土資料集　六

我国分明記

十九代
久基製

全

西之表市立図書館

刊行のことば

西之表市立図書館長　河東　瞭

昭和五十八年度図書館事業の一つとして、ここに郷土資料集「我自分明記」を刊行することとなりました。刊行のねらいは、資料の保存と、多くの人達に利用して戴くためですが、保存の面から云えば原本をその儘複刻するのがのぞましいものの、草書、くずし字等利用の側からは不便であります。従って楷書に書直したうえ紙数も節約することとしました。

読み易さということから読下し文に、とも考えましたが、原本を尊重すること、皆さんに少しでも古文書に親んで戴く手がかりの意味をも含めて漢文体原文の儘としました。又、文中「被仰付」「被仰附」の付、附のように用字の不統一のところとか、異字体、例えば元録の録のような場合も原文のまゝとしました。たゞし、句点は校閲とともに平山先生にお願して当方が付したものです。

各位のご高批と今後の資料集に対する要望等お聞かせ下されば幸いに存じます。

我目分明記について

図書館協議会委員　平山武章

私が「我目分明記」という書名を知ったのは、海洲から引揚げ後で「種子屋久先賢伝」の、種子島久基伝を見たときであった。その中に「施政の参考すべき事項は細大洩さず、統計表のごときものを座右に供せられたり」とある。

本の紹介記事としてはあまりにも簡単であるが、強く興味をそゝられ、必見の書として脳裏から離れたことはなかった。しかし御館の原本を見る機会には仲々めぐまれず、時を逸した感であった。

二十年ぐらい前であったか、県立図書館に郷土史関係の本の閲覧に通った折、昭和二十年写しの岩永氏の写本「我目分明記」を見て、この機をのがしてはならじと決心した。そしてすぐ筆写にかゝったが、これだけでも相当の時間がかゝるという見込みで、とりあえず三十五ミリフィルム二本に納めた。たゞ用意不足で、自然光の中での撮影だったため、ピントがあまく、コントラストも弱いという難点をもつ、不本意なものであった。

私はこのフィルムを、十倍のルーペで幾度繰返し読んだことであろうか。出版いは無いというものの、写字の書き癖、音訓の使い　わけ、借字など、解読には相当に苦労したが。

さて、種子島には「懐中島記」と「方角紀帳」という二種類の座右便覧がある。

前者は元禄二（一六八九）年、上妻隆直の編纂。後者は元録十一（一六九八）年、編者はこれも恐らく、家譜編纂にたずさわった上妻隆直と考えられる。

内容は、前者は比重を島政において編纂されたもの、後者は、里程・人口に比重をおいて島勢に関する記述といえよう。

この二書に比較すると「我目分明記」はかなり性格が異なる。

それは、編者・種子島久基が才十九代の種子島々主であり、そして藩籍の家老座にあって、農林、通産、経済面に深くたずさわった人物だというにとゞまらず、記録好きという天与の資質による点が大きいと思われる。

この度、西之表市立図書館から、郷土史料編として、この「我目分明記」が刊行されるに

当り、その校閲を依嘱されたので、まず、御館の原本と岩永写本を比較したが、相違点では
「神社佛閣寺院并門主之事」では、岩永本では
国分鷲峯山遠寿寺
高圓松竜山水永寺
右の二寺の記事が脱落していることが見付かった。
さて「我日分明記」の内容についての特長であるが、まず、社会経済史的に、極めて貴重な記録に富むことである。
たとえば、鹿児島から江戸に上る道程として、細島に出て、海路大阪に行き、そして東海道を行くコース。あるいは、小倉、下関を経て、中国道から東海道を行くコースなど、それぞれの日程、旅費などの詳細。
一例をあげると
鹿児島↓細島　二日半、四匁五分、
細島↓大阪　船十二日半、五匁八分。

大阪↓江戸　七日、八十四匁四分三厘
とか。
小倉と下関、すなわち関門の渡船料が、
小舟一、水夫三、四匁五分
など。
あるいは旅程記事の中に、急料、中急料、早道料、静料などの用語があるが、思うに、急料（いそぎりょう）は急行料金か、そして中急料は、その上か下か。早道（はやおい）料は、特急料金にあたるのではあるまいか。静料は、船待ち、川どめなどによる、予定より滞在が延びた場合ではあるまいか。
独断的に言うと、鹿児島、江戸間の日程は二十二日間というのが、いわば普通の道中だったので、二十二日以上になると静料をみなければならない。これを大急ぎで二日も縮めると、なると、船なり、駕籠なり、馬なり、それなりの手当料が要るはずで、それが急料とか早道料として、加算されるべき費用だったのではないかと思われる。

さらには、長野金山や芹ヶ野金山の詳細な記述があるが、発見、探鉱、採鉱、産出量などの克明な記述もさることながら、物語性も捨てがたい魅力がある。

また、江戸の金座、銀座での、新貨幣の吹替えがあった際の、旧貨との両替の比率なども、薩藩の対応の姿勢がうかがわれるようで貴重である。特に慶長判の価値は、時代をこえて高い価値、信用性を持っていたことをしめし、金の含有率に民衆が如何に敏感であったか、これは当時の幕府への信用性の表現でもあろうか。

他にも例をあげるときりがないが、特産物について拾い出してみると、他国に出さざる品物として、その中に

ツク綱、ツク

というのがある。

種子島の地方名で、棕梠(しゅろ)をツクというが、これから考えて、ツク綱はつく縄と考えられる。では、薩藩では何時ごろから棕梠栽培が行われたのか、ひいては、種子島では、などの疑問がおこってくる。とまれ、まだ大量には生産できなかったのか、または専売品としての利益

をはかったのか。

水に強い棕梠製品が、鋼綱やその他船具・漁具として、他国の羨望の特産品だったらしいことは想像できる。

また、苧(からむし)芭(あぶらがや)蕉(きあさ)などの名もあり、生蝋・櫨などとともに、薩藩の産業の特異な面を見ることができる。とくに、この蝋の生産は久基の着眼によるものであったことを特記したい。

柚林こと久基が、島主として、また薩藩家老として、質実・剛健を生活の信条としたことは有名である。彼が、二男、三男の結婚について、費用の節減・倹約にどれほど苦慮したか。あるいはその結婚観は、など、実に多くの示唆にとむ内容であることを述べ、御通読、御活用を御願いする次第である。

我自分明記

十九代
久基製

全

御先祖様御貴名并御俗名御法名

一忠久公　御元祖

嶋津左兵衛

一忠義公

三郎兵衛尉、修理亮、大隅守、御法名号道佛

一久經公

下野守、豊後守、修理亮、御法名号道忍

一忠宗公

下野守、御法名号道義

一貞久公

上総助、御法名号道鑒、忠久公より貞久公迄御位牌浄光明寺に御安置、高四百石

一氏久公

陸奥守、修理亮、越前守、三郎、三右衛門尉、御法名齢岳玄久、御位牌志布志即心院ニ

御安置、寺高五拾石、

一元久公

陸奥守、御法名号玄忠忠翁、御位牌福昌寺江御安置

一久豊公

陸奥守、修理亮、御法名号義天存忠、御位牌忠燈院江御安置、寺高百七拾石

一忠國公

修理亮、陸奥守、御法名号玄巻天岳、御位牌浜固院江御安置、寺高七石

一立久公

修理亮、陸奥守、御法名号玄忠節山、御位牌興國寺江御安置、寺高弐百石

一忠昌公

修理亮、陸奥守、御法名源鑒圓室、御位牌興國寺江御安置、寺高弐百石

一忠治公

又三郎、御法名号蘭窓、御位牌吉田津友寺江御安置、寺高拾石

一忠隆公

又六郎、御法名号興岳、御位牌隆盛院江御安置、寺高六石

一勝久公

又八郎、八郎尉衛門尉、修理太夫、御法名号大翁妙達、御位牌隆盛院江御安置

一貴久公

三郎尉衛門尉、修理大夫、従五位下、陸奥守、入道名龍伯齋、御法名号良等大中庵、御影南林寺江御安置、寺高四百六石

一義弘公

又四郎、兵庫頭、従五位、従四位下、宰相、入道名惟新、御位牌伊集院妙圓寺江御安置、寺高三百七拾五石

一久保公

又市郎、御法名怒叅号一唯、御位牌谷山皇徳寺江御安置、寺高三百石

一家久公　初号忠恒

又八郎、薩摩守、薩摩守、大隅守、少将、中将、宰相、位三位、中納言、御法名慈眼院殿華心琴月大居士、御位牌福昌寺江御安置、寺高千三百五拾石

一光久公

又三郎、薩摩守、大隅守、侍従、少将、中将、従四位下、御法名寛陽院殿恭雲慈温大居士、御位牌福昌寺江御安置

出水之郡

一木牟礼城　出水内山門院

右城地文治二年、忠久公拾而薩隅日三州守護職ニ而御下向之節々被成御座候、二代忠時公、三代久経公、四代忠宗公、五代貞久公迄御居城ニ而御衆最初之地ニ而候

一知色城

右、貞久公御代文和三年六月、師久公知色和城御責被成候、此時師久公被蒙御疵候、

一尾崎城

凶徒和泉和色為三郎入道行覚楯籠候処、文和三年六月十三日、師久公尾崎城御責落被成候、味方勢被入替之度、牛屎左近将監高元、肥後筆比凶徒等、和泉之御敵相加り師久公御陣江へ押寄合戦候、

一薩摩大隅両国ヲ日向諸縣郡高六拾萬五千餘石

外二

琉球高拾弐萬三千七百石ヲ諸嶋拾五嶋　合七拾弐萬八千七百石

右寛永十一年八月四日於京都御頂戴

家光公御判物

一其後寛文四年四月五日御判物御頂戴

家綱公御判物

其後貞享元年九月廿一日御判物御頂戴

綱吉公御判物

合高七拾弐萬九千五百石餘

内

五拾六萬五千五百石餘　諸給地高

拾六萬四千石餘　諸御倉入高

右御倉入之内を以諸拂方

一、高三萬弐千七百石之所務
御参勤御道中御船中萬入用

一、高弐拾萬六千参百石之所務
御在江戸中萬入用

一、高壱萬石程之所務
京都御裏方御入用　御藏方御究者無御座候ニ付先大底之考

一、高三千石程之所務
大閤様（小判三百枚）　内府様（小判三百枚）　平松様江（小判弐百枚）御合力分

一、高壱萬千四百石程之所務（米弐百石）
江戸京大坂諸切米御扶持米拂
御國元諸切米御扶持米拂

一、高壱萬三千九百石程之所務
御前様　伝遂院様八丁堀三田御波方用
（米九千俵　御前様　米弐千百俵八丁堀　小判百両）（米弐千俵　信遂様　小判三百両　三田）

一、高三萬八千百石程之所務
京大坂年中諸拂所務

一、高拾萬六千百石程之所務
京大坂御借銀利拂　年府迄

一、高三拾三萬五千弐百石程之所務
御國元諸当用拂

一、高七萬石餘
御下屋敷國分與方御高
拂高
合高八拾七萬七千四百斛程

内

十六萬四千石餘　諸御倉入高

十三萬九千弐百石余　諸浮得を以相調候分高如此

残而

五拾七萬四千弐百石程　不足高

御國中惣人数

貞享元年子年改

一男女五拾五萬七千八拾三人

右薩隅日琉球諸嶋迄

内

男四萬九千九十六人　鹿児嶋中

内

男二千七拾六人　士人躰

男三千三百十弐人　士二男三男

合鹿児嶋士　五千三百八拾八人

一男女拾三萬四千弐百八拾人

右薩州外城

内

男五千五百九拾八人　士人躰

男壱萬千百壱人　士二男三男

一男女拾壱萬七千五百八拾三人

右隅州外城

内

男四千三拾壱人　士人躰

男九千弐拾弐人　士二男三男

一男女五萬四千四百廿八人

右日州外城

内

男三千弐百三拾六人　　士人躰

男六千三百五拾六人　　士二男三男

合外城士三萬九千三百四拾四人 但二男三男迄

鹿児嶋ニ外城士惣合四萬四千七百三拾弐人 但二男三男迄

鹿児嶋士屋敷数

一、千六百四拾壱ヶ所

内

五百三拾四ヶ所　上方

八百六拾五ヶ所　下方

神社仏閣寺院ニ門主之事

一、神社四千四百十五座 但末社除之

一、堂四千四拾六宇 但諸社本地堂除之

一、寺千八百拾五軒

一、高原霧嶋山善林寺錫枝院神徳院

但天台宗東叡山末寺

一、坊津如意珠山龍巌寺一乗院

但真言宗仁和寺末寺薩摩方寺高弐百五拾六石弐斗六升三合六夕八才

一、鹿児嶋經圓山大乗院

但真言宗三寶院末寺小野方寺高八百八拾石六斗五升六合五夕六才

一、志布志秘山宝福寺密教院

但律宗南都西大寺末寺高三拾壱斛五斗六升

一、國分梅雲山正國寺無量壽院

但律宗南都西大寺末寺、高拾四石壱斗五升弐合八才

一、鹿児嶋瑞雲山大龍寺

但臨済宗五山派東福寺龍冷庵末寺、高無之、切米拾石御仏餉ニ竪司領用として被下候、

住持有之候節者其上被下候不定

一、伊集院泰定山廣済寺

但臨済宗五山派南禪寺末寺、高三拾石

一、國分靈鷲山正興寺

但臨済宗五山派建仁寺末寺、高四拾壱斛弐斗七升弐合壱勺五才

一、野田鎮國山感恩寺

但臨済宗五山派東福寺末寺、高弐石

一、志布志龍興山大慈寺

但臨済宗関山派妙心寺末寺、寺高四百七拾一石壱斗弐升六合弐才

一、鹿児嶋王龍山福昌寺

但曹洞宗能州總持寺末寺、殺山五哲之中道別派下石屋派寺、高千三百五拾石

一、鹿児嶋養泉山無量寺不断光院

但浄土宗智恩院末寺、鎮西派寺高弐拾石

一、帖佐如意珠山願成寺

但浄土宗智恩院末寺、鎮西派寺高三拾石

一、鹿児嶋本長山正覚寺

但法華宗本能寺播州本興寺末寺、高三拾石

一、國分鷲峯山達寿寺勅祈院

但法華宗本能寺末寺、高無之切米八石御佛餞料

一、高園松尾山本永寺

但法華宗房州妙本寺富士川家寺、高無之

一、鹿島松峯山浄光明寺無量壽院

但時宗相州藤沢山清浄光明寺末寺、高四百石

一、野田亀翁山西勝院山内寺

但天台宗比叡山末寺、薩州之一寺、高弐百石

一、高原露嶋山神德院

但天台宗江戸東叡山末寺、日州之一寺、高二拾七斛

一、鹿児嶋雲海山般若院

但真言宗当山山伏薩隅日最裝頭

一、大崎飯隈山飯福寺照信院

但天台宗本山山伏薩隅日最裝頭寺、高四百三拾三石壱斗六升壱合四勺六才

御領國中他領境目御番所之事

一、野間之原　出水之内　一、小川内　大口内　一、加久藤　一、須木

一、野辰ノ内　高岡内　一、去川　一、山之口　都之城内　一、梶山

一、紙屋　同　一、寺柱　一、八郎ヶ野　志布志之内　一、夏井　志布志之内　一、鹿谷　上同

御牧数

一、吉野　馬数　取駒　百五十疋　二十疋

一、福山野　馬数　取駒　二千三百十八疋　百五十七疋

一、長嶋野　馬数　取駒　八百四十三疋　五十二疋

一、瀬崎野　馬数　取駒　三百九疋　弐拾弐疋

一、寺田野　三百四十七疋　十九疋

一、高牧野　五百六十四疋　二拾九疋

一、末吉野　三百九十六疋　二十二疋

一、伊作野　弐百四拾三疋　十五疋

一、頴娃野　九十一疋　九疋

一、唐松野　八十五疋　八疋

一、野間野　廿疋

一、青山野　六百八疋　四十壱疋

一、笠山野　弐百五疋　十三疋

一、高牧野　六百壱疋　五十疋

一、青色野　七十七疋　三疋

一、市来野　三百三十疋　十三疋

一、上甑野　七十五疋　弐疋

一、下甑野　四百廿疋

合牧数　拾七ヶ所

合馬　七千三百九十二疋

合取駒　四百三拾弐疋

御船数之事

一、御関船　五十艘　但六端帆より十五枚帆迄

内九艘ハ　鹿児嶋御船手

四拾壱艘ハ　久見崎御船手

一、御荷方船十七艘　但六端帆より十六端帆まで

内十一艘ハ　薩摩嶋御船手

六　艘ハ　久見崎御船手

一、橋船并小船百三拾五艘　但弐枝帆ゟ五枝帆迄

内五拾九艘ハ　薩摩嶋御船手

七拾六艘ハ　久見崎御船手

一、御関船十二端帆一艘

右細嶋江被召置候

一、御関船十三端帆一艘

右大坂江被召置候

一、小早六端帆一艘

一、荷方六端帆一艘

右鼓嶋江被召置候

一、御中間百三拾五人　但御扶持取

内七人　御鉄砲

一、御納戸付御小者七拾七人　但御扶持取

内廿六人　御鉄砲

一、御納戸附御小者百三拾壱人　但御扶持取

内廿弐人　御鉄砲

一、御足軽五百拾五人　但御扶持取

内三拾弐人　御鉄砲

他國江不出品々

一、鉄砲　一、塩焙　一、刀　一、数寄屋道具　一、懸物　一、棕梠竹　一、琉球焼酎　一、薬鉄　一、蘭

一、賣人　一、霧嶋躑躅　一、サクロ木　一、唐桐　一、琉球草木色々　一、古焼物　一、御國白磁　其外焼物

一、硫黄　一、蠟　一、棕梠皮　一、ツク綱并ツク　一、馬ノ尾　一、樟脳　一、漆　一、芭蕉布　一、夢宮蕉

一、上布　一、大豆　一、雑穀　一、藻玉　一、鍋地金　一、鈴　一、明礬　一、鍋　一、下布　一、菁板

一、ホラノ貝　一、屋こ貝から　一、いたら貝から　一、小如か　一、琉球つけ　一、檜扇樽

宿次外城附

一、帖佐　加治木　國分　數根　福山　都之城　山田　清部　日当山　踊　清水　曽於郡
横川　湯之尾　馬越　大口　山野　栗野　吉松　吉田　馬関田　加久藤　飯野　小林
野尾　紙屋　本城　曽木　羽月　高崎　高原　須木
綾
牛根　重水　新城　大姶良　大根占　小根占　佐多　姶良　高山　内之浦　田代　市成
百引　高隈　鹿屋　串良　大崎　末吉　松山　志布志　勝岡　財部　高城　高岡　倉岡
山口　稷佐　卧蛇　平嶋　諏訪之瀬　恒吉　口ノ永良部　口之嶋　悪石　中嶋　宝嶋
御船手　重水　牛根　薩摩　黒嶋
谷山　喜入　指宿　頴娃　山川　竹嶋　川邊　山田　鹿籠　坊泊　種子嶋　知覧　數嶋
屋久嶋　伊集院　市来　串木野　隈之城　日置　吉利　永吉　伊作　田布施　阿多
加世田　秋目　久志　百次　山田　平佐　水引　高城　阿久根　野田　高尾野　出水

高江　長嶋　郡山　入来　山崎　宮之城　出水　樋脇　吉田　蒲生　伊牟田　大村　黒木
佐司　鶴田

六廻支外城附

一、谷山　喜入　指宿　山川　頴娃　知覧　川邊　山田　鹿籠　坊泊　久志　秋目　加世田
阿田　田布施　伊作　永吉　吉利　日置　伊集院　市来　串木野
櫻島　重水　新城　大姶良　大根占　小根占　佐多　田代　内之浦　高山　姶良　鹿屋
高隈　串良　大崎　志布志
郡山　入来　樋脇　山崎　東郷　中郷　平佐　山田　百次　隈之城　高江　水引　高城
阿久根　野田　高尾野　出水　長崎　吉田　蒲生　伊牟田　大村　黒木　宮之城　佐田
鶴田　曽木　羽月　山田　大口　馬越　湯尾　本城　横川　栗野　吉松　吉田　馬関田
加久藤　飯野
加治木　國分　數根　財部　都之城　勝岡　山之口　庄内　高城　高岡　稷佐　倉岡　綾
野尻　高原　高崎　小林　須木　帖佐　山田　満辺　日当山　踊　曽於郡　清水　福山

牛根　市成　百引　恒吉　末吉　松山

小倉筋細嶋筋通路之時分覚

一、銀百弐匁六分六厘

内四匁五分　薩見嶋ゟ細嶋迄二日半旅籠賃

八匁九分　他領都之郡ゟ細嶋迄駄賃

五匁八分　細嶋ゟ大阪迄船中十二日半賦

八拾三匁四分三厘　東海道七日之萬賦

一、銀拾四匁　一年下り

但船中三拾日之賦、西目東目共ニ船中御賦方迄相替り不申候、中早共ニ応日数、三拾日之割を以相渡申候、御国元ゟ小倉筋中国筋東目筋江戸迄上下三人静新

一、銀三百廿八匁八分六厘

内一銀三百廿四匁三分六厘

内銀廿七匁三分　小倉道中一人賦

〃四拾目六分六厘　中国道中右同

〃四拾目壱分六厘　東海道　右同

右小倉道中中国道中ハ東海道賦

一、上り小倉正月二月七月八月九月十一月十二月

細嶋三月四月五月六月

下り小倉正月五月六月七月十一月十二月

細嶋二月三月四月七月八月九月

一、銀六拾弐匁壱分六厘　一年上り

内八匁　他領都之郡ゟ細嶋迄送天竜人賃金

十四匁　船中三拾日之賦

四拾目一分六厘　東海道萬賦

一、銀六拾四匁六分弐厘　一年下り

右同

東目筋上下中急料

一年上り
一銀八拾弐匁六分四厘五毛
内五匁九分三厘　他領郡之郡ゟ細嶋迄駄賃
六匁三分　鹿児嶋ゟ細嶋迄三日半旅籠賃
八匁六分弐厘　細嶋ゟ大坂迄船中十八日半賦
六拾壱匁七分九厘五毛　東海道急料

一年下り
一銀八拾四匁六分壱厘　右同
東目筋上下早達料
但壱人ニ付百八匁壱分弐厘

一銀四匁五分　小倉ゟ下関迄船渡
右小船壱艘三人水主船賃時ニ与り相重り候儀も御座候
御國元ゟ小倉道中中国筋右同断上下三人中急料

一銀四百六拾五匁九分一厘五毛
内銀四百六拾壱匁四分一厘五毛

内銀三拾四匁九分弐厘　小倉道中一人賦
同五拾七匁九厘　中国道中右同
同六拾壱匁七分九り五毛　東海道　右同
右小倉道中中国道中并東海道賦
但壱人ニ付百五拾三匁八分五厘

一銀四匁五分　小倉ゟ下関迄船渡
右小船壱艘三人水主船賃時ニより相重儀も御座候
御国元ゟ小倉筋中国筋右同断上下三人早達料

一銀六百三匁
内銀五百九拾八匁五分
内銀四拾弐匁五分四厘　小倉道中一人賦
同七拾三匁五分三厘　中国道中右同
同八拾三匁四分三厘　東海道右同

右小倉道中中国道中并東海道賦

但壱人ニ付百九拾九匁五分

一銀四匁五分　小倉ゟ下関迄船賃

右小船壱艘三人水主船賃時ニ寄相重り候儀ゟ御座候

一、宝永三年戌取納米書出し

現高頭拾九萬弐千八百三拾七斛六斗九升余

但表方拾俵供御新田其外御蔵入

三斗三升四合六夕五才代ゟ

西秋取納米

納米六萬四千五百三拾四斛弐斗壱升餘

右之内飢米御借米並米引

残現納り

六萬千七百六拾斛五斗弐升餘

但三斗弐升二勺七才代ニ廻候

一、宝永三戌年書出し御切米并定飯米員数

米壱萬六千三拾五斛

元禄十六未年一年之總り

一、銀三千七百拾三貫四百目　江戸拂

一、銀弐千九百七貫百目　京都拂

一、銀弐百五拾貫目　大坂拂

一、銀三千三百四拾八貫五百目　御國料

合銀壱萬弐百四拾八貫五百目

京都江戸大坂御國御時借銀

一、銀四千三百廿貫目

京都年府銀

一、同弐千弐百九拾七貫目

江戸京都古御借銀

一、同千百六拾貫目

一米拾弐萬斛 但出来米并道之嶋米込ヲ

一大嶋 廻り五十九里拾丁 廻里嶋百四拾三里
高 壱萬四千五百廿石壱斗弐升九勺五才

一德之嶋 廻り十七里三丁 廻里嶋ゟ百七拾九里
高 壱萬三千六百九拾九石壱斗九升 武合八勺

一沖之永良部 廻り十里八丁 廻里嶋ゟ武百三十四里半
高 五千八百廿八石八斗壱升四合五勺壱才

一與論嶋 廻り三里五丁 廻里嶋ゟ武百四拾七里半
高 二千四百弐石七斗五升九合一勺八才

一喜界嶋 廻り六里廿丁 廻里嶋ゟ百五十八里
高 壱萬四百八十六石六斗九升壱合四勺三才

合高四萬四千九百三拾七斛五斗七升八合八勺七才

但萬治二年之御竿

一琉球 嶋廻り七拾五里 廻里嶋ゟ武百九拾五里半
高 六萬弐千百九拾九石六斗壱升六合七勺四才

一琉球國司領諸嶋高九萬八百八拾三石九斗壱合弐勺

一江戸行船役目ニ付積間被下候定

米五石足 但千四百五升 一石ニ付八十壱升

右御運校方并御家老

米三石足

右御番頭并御用人御留守居

御参勤之節御供五之御船数覚 但御先除

一御座船弐艘　　一塗小早小鷹九壱艘

一白小早八端帆三艘　　一塗早崎四枚帆壱艘

一御引船十端帆弐艘　　一水傳間六端帆弐艘

一御湯殿船十端帆壱艘　　一使船三枚帆九艘

一釣流三枚帆壱艘　　一関十三端帆ゟ十五端迄拾九艘

合四拾三艘

一中乗大根千三百六拾三人程

一船頭三拾三人

一主馭拾三人

一水主千五百九拾六人

宝永七寅正月勘定之表

江戸京大坂長崎御國御借銀高

一銀壱萬七千五百七貫目　江戸

内七百弐拾貫目

三千七拾七貫目　御國

七千弐百弐拾七貫目　京都

内千八百貫目　年府

但一年ニ六百貫目ツヽ御出し

四千九百六拾貫目　大坂

千五百拾七貫目　長崎

但蔵し銀

御國行賦

一主従三拾五人　象馬壱疋　遠方

萬解以上　御家老

廿四人　近所

一主従弐拾三人　象馬壱疋　遠方

拾五人　近所　若年寄

諸金山　一年分

一玉金五拾六貫六百目

一嶋津茂路守殿御家筋者、吉貴公与里七代先之御先祖様、陸奥守貴久公之御次弟、嶋津右馬頭忠将家之次男家ニ而、嫡家者嶋津小源太殿家ニ而候、茂路守殿居城佐土原之城者、前代ゟ嶋津家領内ニ而、慶長年間龍伯公御甥嶋津中務大輔豊久居城ニ而候処ニ、関ヶ原ニ而豊久事戦死、以後権現様ゟ御意を以、山口勘三衛殿ゟ庄田三太夫与申人を被差下、暫御番今城ニ而御座候得共、豊久事奉対　権現様無逆意趣違　台聴佐土原之儀、龍伯家久与里親類之内ニ而、番年可申付旨被仰付候処、慶長六年龍伯公御家中之御従弟嶋津右馬頭征久入道宗怒事、其前嫡子ニ家督相譲り隠居ニ而候得共、龍伯様御父子様ゟ里被仰付、二男召列佐土原城番ゟ相勤、其後龍伯様御父子様ゟ、佐土原城宗怒江拝領被仰附度旨御願ニ而、宗怒ゟも御目見願ニ而、頼相連慶長八年十月宗怒江佐土原拝領被仰付、御直参ニ被相成候。

宗然二男右馬忠興ハ、淡路守殿曾祖父ニ而候。

一、嶋津八郎右衛門殿御家者、光久公御代ニ嶋津家之御氏族之由ニ而、系圖被遣嶋津之號許候様ニと被仰遣、光久様ゟ此御方御系圖志ゟ遍被仰付候得共、不相知候得共、八郎左衛門殿嶋津相模守遲久子出家いたさ代長徳軒と申候て子孫之由相見得候。右に付而ハ此御方古老之申傳候筋も候処、嶋津之号被為名家候儀、御心次第可被成与被仰遣候。

一、一向宗御禁制者、御当國之一向宗者上方筋之宗旨ニ相習り新宗与申候而、邪法ゝしき障碍をなし、同宗ニ志たしミ強く徒黨を結ひ、君臣之禮を背き父子之分もなく、無作法ニ有之仇をなし候儀或有之、御家御代々御制禁ニ而候。

一、琉球國者御家九代之御先祖、陸奥守忠國公御御忠節事有之ニ付、普廣院殿ゟ里御拝領、永享年中ゟ御当家之御幕下ニ而、年々貢物等不怠候処ニ、慶長年中致違背ニ付、権現様江中納言家久公御伺ニ而、御人数差渡さ連、慶長十四年之夏御攻取被成候。

一、薩州嶋ゟ里琉球之内、はて頭まで、海上四百五里、那覇まで弐百四拾里。

一、御当家嶋津御先祖者、豊後守忠久公与申候。頼朝公之長庶子ニ而、八歳ニ被成御成候時、

文治二年頼朝公ゟ御下文を御賜り、薩隅日被成御拝領、忠久公御子大隅守忠時公ニ而候、忠時公御子下野守忠久公与里当大守吉貴公まで弐拾壱代ニ而候。

一、大平記ニ嶋津上総入道与御座候者、忠久公ゟ里五代、上総介貞久公之御事ニ而候。

一、嶋津四郎与御座候者、板行本ニ有候者嶋津家之人ニ而無之、曽我奥太郎時久与申人ニ而候、其證據者参考大平記ニ見得候、嶋津家之大平記ニ成、曽我奥太郎時久と有之候。

一、於日州新納院高城大友家与御合戦、大友家敗亡候、天正六年十一月十二日ニ而候。修理大夫義久公御代ニ而候。

一、肥前嶋原龍造寺山城守高信与御合戦、右之義久公ニ而御座候、大将分ニ而被遣候者、三番目之御舎弟嶋津中務家久ニ而候、隆信を討候者、川上左京久監にて、天正十年三月廿四日ニ而候。

一、豊後利満にて大友家与御合戦、御勝利候も右中務ニ而、天正十四年十二月十二日ニ而候。

一、大閤秀吉公薩摩江御入候者、天正十五年四月廿五日ニ而候、恭平寺江御着府候者同月廿八日ニ而候、御先手之衆内小西攝津守、九鬼大隅守殿、脇坂中務少輔殿杯、薩州平佐之城御

攻候、右城預り植神祗忠防与申ニ而候。同州筋總大将羽柴美濃守殿にて候、御先手黒田官兵衛殿、宮部善祐坊、曰州目白与申所まて押入被陣取候、其後安國寺高野木食上人杯壁ニ而和睦ニ罷成候、同五月八日龍伯様恭平寺江御出御目見得被成候。

一、高麗江者兵庫頭義弘公御嫡子又市郎久保公御両人御越、文録元年二月廿七日栗野御立、出水ゟ御出船、名護屋江御渡、同四月十二日名護屋御出船、同五月三日高麗釜山浦（御着船、被召列候軍士壱萬餘人、久保公文録二年九月八日、唐島にて御病気御逝去、依之中納言様又八郎忠恒公被申候時、同三年八月伏見より直ニ高麗江御渡海、於朝鮮諸將共ニ晋州城攻落、其後從済敵方番船破之節も御粉骨被成、敵船百六拾艘御切取、数千人之首御取候、且又南原城攻落さ れ候節も御軍功有之、義弘公御手に首数四百餘御取候、依之数通之御感状御給り候、就中慶長三年十月朝日、泗川島銀城江明兵弐拾万餘寄来候節、被得大勝利首数三萬八千七百餘御取、其外撃捨不知数由ニ候、此御勝利日本惣勢歸朝之節被引取候由、然處ニ翌月十八日、順天在城之諸將小西攝津守行長を始番船被相圍、被引取候儀不罷成候処、義弘公御父子立花左近將監殿、宗對馬守殿、寺澤志摩守殿、高橋主膳殿、被仰合番船

被打破候ニ付、順天之諸將無異儀被引取候、此時戦死之着許多ニ而為有之由ニ候、右泗川為御軍功御官位被仰附、御知行并御賜物御持領。

大閤様薨御之後故五大老様ゟ里之御判形之御感状ニ而候。

一、御帰朝者慶長三年ニ而候

一、當大守様御名、正四位下左近衛権中將兼薩摩守源朝臣吉貴

一、忠久公始而薩隅日三州之守護職ニ而御下向文治二年ニ而候、出水木牟禮城ニ被成御座候。

一、當御城者慶長七年、家久公山下ニ御屋し起構ニ而御移り。

一、鹿児嶋士人躰　弐千四百七拾人

一、右同二男三男　四千九拾壱人

合六千五百六拾壱人

三ヶ国

一、外城士人躰　壱萬三千八百四拾三人　但私領除

一、右同二男三男　弐萬六千程之賦

惣合士四萬六千五百九拾四人之賦

一足軽小頭五拾人

一足軽千百六人

内七百廿壱人　御譜代

三百八拾五人　御雇

一御中間小頭拾六人　一御中間百七拾壱人

一御小者百五拾七人　一御書院附弐拾人

一御納戸附小頭廿五人　一足軽弐百五拾弐人

一三ヶ國惣人数

元禄十一年実録

一四拾弐萬九千七百六拾弐人

右同

一琉球拾五萬五千百八人

右同

一道之嶋四嶋四萬九千四百七拾弐人

一三ヶ國百姓廿壱萬四千弐百廿三人

一出物米三万八千八百廿七石九升

御領國名所

一薩州出水郡ノ内　同川辺郡ノ内

一隼人之瀬戸

一神之小嶋

同郡ノ内

一奈気木之森

一気色之森

同郡ノ内

一唐之濱

同郡ノ坊ノ津ノ内

一南泉院者薩州伊佐郡大願寺与申候而天台宗之古跡有之候、右大願寺ゟ寛陽院様ゟ公儀江御願ニ而、御城内とも申迄き程之処ニ引移、御宮ゟ御代々様之御位牌をも御立置被成候処ニ地狭く其上差支候儀とも有之、大玄院様より別所へ奉移だく被思召、そろ〳〵其御年当なさ札候、近年御成就ニ而御遷宮相調候、吉貴公ゟ上野寛永寺様へ御願ニ而、大雄山南泉院与御改被下候、寺高五百石。

一前方之儀者福昌寺ゟ兼住にて、御法事之時者神徳院式罷越相勤候。

一犬追物者忠久公於鎌倉被成御始古、此道専弓馬之故実有之事ニ而、御当家御代々御傳来之事ニ候、御家督御相續之節者、御代初之犬追物と申候而、必有之事ニ候、光久公御代正保三年四月七日、於江戸芝御屋敷ニ而、御老中様方御招待ニ而御張行有之、同四年十一月十三日於王子村御張行有之、大猷院様御覧候。

一、琉球江漂着之唐船前ニ者、破損不仕節者琉球ゟ直ニ帰帆申付、其首尾江戸長崎江申上候、破損之節者、唐人共長崎江申遣候（共、中山王より里依顆以来、漂着之唐船数破損候而も、直ニ唐（送り遣筋ニ、元録九子年被成御免候、宗門疑数異國船漂着ニ而数破損候ハヽ、異國人并荷物等長崎江送遣候筋ニ被仰渡候。

一、置米貢数三千三百弐拾斛

一、事木野　一、平嶋　一、高江　一、西方　一、山崎

一、旬田　一、底嶋　一、大口平出水　田市地　一、高福　一、片浦

一、大浦　一、内之浦　一、志布志　一、石山村　一、久志

一、泊　一、山川　一、小根占　一、五町村　一、八日町

一、敷嶋

一、江戸江毎年相廻候米貢数、壱萬弐百斛餘、船廿六艘程

一、所高壱萬七千六百三拾弐斛程

出水士八百五拾人　人躰

高六千五百六拾九石程　衆中持高

士惣人数弐千三百八拾四人　男

用夫千三百弐拾七人

一、諸所仕上ヒ新田納米代　私

生臘、臘代年荷代

合銀五拾貫目餘丈夫成算用

一、青駄荷　四拾貫目

一、乗掛人夫惣様四拾貫目

一、から荷　五貫目迄之荷物者不苦候、夫ゟ重ミ候得バ木駄賃ニ相成候

一、人足壱人持五貫目

一、長持壱竿三拾貫目

五貫目持之賦、人足六人掛り公儀御免

渡唐船弐艘之時

一、銀八百四貫目　公儀御免

一、荷売懐之時金子二千両方三千四百両　公儀御免
一、同四百弐貫目
右者渡唐金高之内減少候様にと先年公儀より仰渡御座候節、御類之趣有之、千二百両之減少ニ被仰渡、夫より以来当分迄、隔年ニ右之銀高被差渡御事之由相見得申候。
但小唐船之年者右之半分ゟ差渡事ニ候。
一、年八半分渡候儀も御面為有之事ニ候。
一、桜嶋年年生蠟、臘之拳
合拾六萬三千四百五拾六斤半
代銀千八拾六貫九百八拾五匁七分弐厘
内九拾貫百廿弐匁四分弐厘本年用
残而九百九拾六貫八百六拾三匁三分御利潤占
一、種子嶋、南北拾六里東西一里二里乃至三四里
一、高八千七百廿三斛一斗弐升三合　十八ヶ村
外新仕明高千三百弐拾六石

一、高千五百拾三石弐斗九升三合　御國地
合高壱萬千四百七拾七石壱斗弐升九合五勺
内四千七百三拾五石壱斗九升三合　倉入
三千五百八拾六石三斗八升四合　給地
四百壱斛五斗四升六合　寺社領
一、馬毛嶋、南北壱里餘東西半里計平地無田畠、本嶋ゟ五里西ニ有（澄瀧並海草取方五ヶ浦其外浦々ゟ賜手ニ申付候ゟ海草ニ塩を取納す）
一、嶋主元祖之事
号肥後守信基者、大政大臣平清盛公嫡男安芸判官基盛男、左馬頭行盛之子也。平家没落之後、北條平時政為養子、在鎌倉、時政以執奏賜種子嶋（四郡四領　五人衆長郡）下領之。元祖信基、信式、信真、真時、時基、時充、頼時、清時、時長、幡時、時氏、忠時、恵時、時堯、久時、忠時、故當久時十八代凡五百有餘年。先此嶋鎌倉御倉入也、地頭大浦口在鎌倉聽莫、上要民為代官在嶋宰税、又高野入道上郡、野間入道中郡、熊毛入道下郡、以上三郡可入道也。
一、嶋主姓之事

号薩摩大浦口姓也、当嶋下向之時、請之改平姓云々

一、嶋主幕之故之事

三鱗形時政讓也、又亀甲内上祢匂蝶大浦口紋、為家毎例年頭親式用此紋

一、嶋主重代大刀之事

大刀一腰無銘也、長武尺五寸二分反一寸弐分、信基家傳大刀一腰、備前三郎國宗、号松作、長二尺八寸五分反一寸三分、時政讓之太刀也、

一、文和二年八月廿三日　将軍義詮御感状之通 但肥後佐 江 近将監

一、應永十五年十月八日、元久公与里、屋久、永良部両嶋被成下候、御状一通、但肥後佐近将監 江

一、應永十五年十月八日、大主元久公御神文之通、但肥後佐近将監入道 江

一、永享八年八月七日、薩摩守好久神文之通、但種子嶋へ

一、永享八年八月十日、薩摩守契約状之通、右同

一、明應六年三月十六日、口宣案一通、尤兵衛尉藤原忠時、宣任武蔵守

一、永正八年十二月廿九日、大守忠治公御證状之通、依重忠被成下候御状也、但種子嶋武蔵守

一、天文十年四月七日、口宣案之通、尤兵衛尉平直時、宣任彈正忠

三月五日、近衛関白稙家公御状之通、但種子嶋彈正忠

一、弘治四年二月十七日、口宣案一通、従五位下平時堯、宣任尤近衛将監

一、天正八年十月五日、大守義久公、御諱字御免状一通、種子嶋三郎次郎

一、大守義久公御神文一通

一、永正十年、七島卧蛇嶋よ里、納物日記壹部

一、赤尾木三ヶ寺之事

本寺 法陽 薩州 本能寺 本興寺 吉祥山 寺領百斛 社領三拾斛 在摩州 武拾斛 尤免地 尤反五畝八歩

本源寺

釋迦堂 十間 十二間　六尺三寸間　厚板葺

祖師堂 六間 五間　右同　右同

社壇 二間 四間　右同　右同

拝殿 二間 三間　右同　右同

方丈　七間七尺八間　右同　板葺

日蓮大上人曼陀羅一軸

建治三年十月御筆

嶋主十四代忠時奇進天文十八年十月十八日有文書

安國論御書一軸　洛陽宗真筆

洛陽宗真筆

寺號額　洛陽宗真筆

嶋津十七代忠時奇進

文明元年草創、開山淨光院日良法印生国開基大檀嶋主十一代時氏、法諱金山院日鈞大居士、元録二年まで二百弐拾一年、開山ゟ当住日慎ニいたり住持十四代、元録六年造營、願主十四代時堯、息時次事業七歳ニ而死去為善堤両興、是時移寺地於時堯屋地、至今月元録六年百弐拾七年、社領三拾斛之事

塙田村河上田、十六代久時依心中所願奇進、盡未来際不不可変此土地旨、慶長四年正月十

一日有文書。正月廿日、嶋主招請当寺古例也、有勝部式法、吾詠歌題鶴鶴式也、客亭一首宛至相伴面々

一信基ょ里七代頼時代、御家之御幕下ニ成候与相見得候、氏久公菊地之御合戰之時、頼時七人之大將之内ニ被仰付、貞治五年丙午四月十六日、日岡にて戰死、嫡子八代清時ニ、頼時忠死ニより氏久公ょ里、薩州仙台於日破田賜八十町

一應永十五年十月八日、大守元久公為忠節賞、屋久永良部両嶋を八代之賜清時

一大守久豊公より、硫黄・竹嶋・黒嶋三嶋を八代賜清時

一應永三拾年忠國公日州海江田城江御出陣之節、八代清時為軍代、弟因幡守時貞、八月参進鹿府、于時遅参之由御出合有之、難海之故遅参之分申上候得とも、右遅参ニ依而恵良部を久豊ニ差上ル

一同三拾四年正月四日、大守忠國公ゟ恵良部嶋を九代之賜時長ニ

一九代時長代、依違事硫黄・竹嶋・黒嶋被召上

一十代幡時代八月十日、好久公ゟ、川部郎七嶋之内、臥牛・平嶋賜二嶋、但年号知す

一、十一代時氏代、種子嶋、屋久、永良部同三嶋、日典、日良両上人之聞法談、法華宗ニ改ル

一、十一代時氏代、本源寺建立、山号吉祥山、開山日良上人

一、文明十七年六月、大守忠昌公、飫肥之伊藤祐國陣ニ懸リ御合戦之節、十二代忠時御供仕、抽軍忠、忠昌公為御感賞、賜御諱字号忠時、年十八歳時也

一、十二代忠時代、三男越前守政清、蒲生越前守充清家ヲ継

一、鉄炮渡リ候事

天文十二年八月廿五日渡ル、十三代恵時之代也、加賀守意釣、寳永二年まで百六拾一年

一、十六代久時代、始而大守義久公於御前、天正七年元服、其前者祖神之於社檀元服

一、十六代久時、義久公ヶ御諱字ヲ賜ふ、初兎時改久時、但十月五日年号不知

一、十六代久時、朝鮮國江御供仕、義弘公忠恒公直ニ自朝鮮國上洛、久時御供、於伏見御家老職被仰付、致下向候節、於佐多補賜五百石今ノ寺田也

一、十六代久時代、文録四年秋所領之地交替ニ而、種子嶋、家久、永良部三嶋差上拝領ス・薩州内知覧地

一、十六代久時代、六月、累代之本領種子嶋両拝領

一、同久時代、屋久、永良部両嶋暫く為御借地

一、光久公より、十八代久時賜御諱字、号久時

一、太守御家与嶋主家縁與之事

勝久公御息女、嶋主十三代恵時室

男子志人出家、勝本院日法、不見系図

日新公御息女、嶋主十四代時充室、女子弐人、一人者伊集院忠棟室、早世。一人者、龍伯公御兼中、御姫二人。壱人ハ嶋津久仍母、一人ハ家久公簿中、号國分御前。義久公簿中時発恵女御姫三人右ニ記家久公御息女、嶋主十七代忠時室、女子一人男子一人。嶋主十八代久時是也。光久公御息女、嶋主十九代義時室

一、種子嶋主水時春家之事

能登守時通嫡女、奉仕龍伯公簿中、称一之臺、賜新地千斛、伊勢長門守貞清三男主人時盛、為一之臺養生、時盛至當主水時春四代

一、種子嶋内記家之事

嶋津十二代、忠時四男出雲守時述、對家嫡有逆心事被誅。時三歳幼子あり里、乳母藏懐中竊出此嶋、住國府。成長して号出雲守時運、嶋子六兵衛時秀之流也、内記六代

一、種子嶋伊兵衛時壽家之事

右六兵衛時秀妹、南郷久八忠吉生、忠清、忠吉死後、大守家久卿、光久卿為御局、賜新地三百斛、依光久公命、時壽祖母継遺跡、貴忠清子也

一、肥後州於矢崎水俣、軍忠戦死之事、天正八年、大守義久公御代、嶋主久時代百十年

一、肥前州龍造寺隆信嶋原御合戦之事

天正十四年秋久時往々軍忠、嶋士九人戦死百四年

高麗入之事九十七年

文録元年より至慶長四年、久時軍事不可勝計

一、所替之事（事）

文録四年久時移知覧、慶長四年踏本嶋。是時嶋津豊廚以移此地、家新地、忠興此嶋誕生

一、屋久永良部両嶋被召上事九十二年

慶長四年當嶋本復之時、両嶋之儀一節（節）、有御借用之儀、居當嶋代官、奉鹿府公用有此年、

慶長十六年極月久時死去、忠時未生前、鹿府士嶋徒其直為公領御證文、慶長十一年焼失云々

一、庄内弓箭之事

自慶長四年春至五年春。十二月八日、嶋士数十人戦死。九十一年

一、関ヶ原御陣之事

慶長五年九月、當嶋軍士三人、於伏見御館戦死

一、琉球入之事、八十一年

慶長十四年二月、嶋士数十人渡海

一、御茶入号茶壺進上之事

寛永六年大守家久卿江十七代忠時

一、當嶋御倉入、揚四千斛事

寛永十年秋也、是慶長末年、御分國中御年貢、此時嶋主幼稚也、家老以不勤、一萬四千斛

検地也、以壱萬石為本高、四千石為御倉入歎、雖許之無許容、数年貢納、鹿府依理不盡。
漸々相違賜之

一、廻國上使御下嶋之事五十七年

寛永十年、屋久嶋与御渡海嶋間陸御通道赤尾木著。小出對馬守殿、城織部、能瀬小拾郎殿
以上
三人、鹿府御家老川上因幡守久國御供

一、忠時夫婦鹿府居住之事四拾七年

寛永弐拾年六月、光久公命也

一、特軍家忠時奉見事

寛永七年四月十八日　家光卿江　江戸桜田館御成之時、同廿一日大相國秀忠卿江、寛永十八
年五月十二日家光卿江、光久公使之同二十年九月十日家光卿江、右同断之時

一、天下證人久時勤之事三十八年

奉為大守光久公、自承應元至同二年

一、法華經一部一巻進上之事

寛文三年　大守光久公江十八代久時

一、古今一部見野筆一、唐繪一軸玉燕見胡國人進上之事

同年八月綱久公江久時

一、將軍家久時奉見事

家綱卿江承應二年正月三日　證人之時
家綱卿江万治三年七月朔日　光久公御使之時
家綱卿江寛文二年九月朔日　右同断之時
綱義卿江貞享四年八月七日　継貴公御家督時

一、嶋主年始　大守自見之事、古例者鹿府参上之時正月十一日、御太刀目録進上、鹿府居住以
後四日、以式日往古依無打籠進上、改席独立御客御寄合也、進年久時御家老役、依之御役
目并元日御太刀進上、家御太刀義時進上式日

一、船大小数之事　嶋中

八十艘

内 大船弐十壱艘 但 九端帆之里四枚帆迄 外八小船

一、鉄炮之事　嶋中諸士持筒

九拾一挺 六匁より 一匁まで

一、足軽持筒　但 二男三男迄

一、嶋中士人数之事

赤尾木士　弐百拾八人

諸村士　百九拾人

合四百八人

一、嶋中足軽之事

赤尾木 并 諸村弐百弐人 但 二男三男迄 中間込ム

一、嶋中牧数之事

一、野間村之内　本増野　駄数弐百四拾七疋

一、油久村之内　大町野　駄数百五拾九疋

一、嶋間村之内　崎原野　駄数百五拾五疋

一、中之村之内　前田元野　駄数九拾三疋

合四牧駄数六百四拾四疋

一、嶋中寺之事　弐拾八ヶ寺

但 赤尾木 并 諸村迄

一、嶋中牛馬千百四拾疋

但 定請不増減、永代以定数致出銀苦也

一、御国江上使御下之節、藏人持高一萬斛餘与被書出候

一、寶永五年子八月、増上寺火之御番御勤之節、増上寺役僧江、彈正高之儀者親藏人持一萬斛餘与被書出候

一、藏人御役分地者不被下、心附為御役料米千弐百俵、元録八亥年ゟ被下候

一、新小判小形　一両代金四分懸り　十両廿四匁懸り　百両弐百四拾目懸り　千両弐貫四百目懸り

一、相場直成
往古小判一両ニ付
元録室永共同仕候筈
但当時通用之小判壱両代、当時通用之銀を以七拾三匁相場之由ニ候ニ付十割増として百四拾六匁
三室四室
一、往古銀ニ而七拾三匁
一、元録銀ニ而九拾壱匁弐分五厘
二室
一、室永始之銀ニ而百拾弐匁三分九厘
右元録室永同仕
一、只今通用之小判壱両ニ付
但三室四室
一、只今通用之銀を以、当時之相場七拾三匁
一、元録銀ニ而三拾六匁五分
一、寶永初之銀ニ而五拾六匁壱分五厘三毛
一、慶長小判壱両ニ付

一、慶長銀を以六拾目
三室四室
一、只今通用之銀ニ而百弐拾目
一、元録銀ニ而七拾五匁
二室
一、寶永初之銀ニ而九拾弐匁三分七毛
新金銀共ニ慶長ニ同し
一、私壱人ニ而御勝手方相勤候者、室永七年庚二月より
一、私江横目頭被仰付候者、元録十二年卯三月二日、大野半人殿御取次ニ而被仰付候、図書殿御当番江戸詰者、元録十三年辰正月十二日御供ニ而罷立、巳五月六日江戸罷立、六月十八日致下着候
一、右同室永五年子四月十日、御供ニ而罷立、翌丑八月十五日、御供立ニ而致下着候
一、御勝手方江相勤候様にと被仰渡候者、室永弐年酉九月九日、川上式部殿ゟ直ニ被仰渡候
一、若年寄御役名被召替候者、寶永弐年酉十月十日、御休息之間ニ被召出、御直ニ被仰付候
一、京都ニ罷上候者、室永二年酉十月十五日ニ被仰付候

同十六日罷立、同廿五日之朝鼓京着十二月三日京御罷立、同廿一日御当地江致下着候

一、御家老役被仰付候者、宝永七年寅六月廿八日、御座之間ニ而御直ニ被仰附候

但山梔様御役御免被仰渡候茂同日

一、出水地頭被仰付候茂、同日御同座ニ而肝付主殿殿ゟ被仰渡候

右拂方之儀、年々出入御座候故、大抵之賦ニ而御座候

右之書附御字共除候而、御家老座ニ而書直し候。正徳四甲七月之算用出、押札御内證御見合、僧正へ不遣候

不足高五拾七萬四千弐百斛

内

弐拾六萬千四百石　諸浮得を以相済候

拾壱萬五百石　御判物高外増高を拂相済候

三萬弐千八百斛　道之嶋乃所務ニ而調申候

残而

拾六萬九千五百斛程之不足

右之不足高之分者上方御時借、又者先キ年所務を先納ニて請取相調申候

一、出水衆中惣人数弐千四百四拾九人

内八百五拾人ハ人躰千五百廿九人ハ末子迄

六拾五人隠居

一、出水衆中高六千七百廿九石四〆九升九合七勺七才

一、御勝手方江相勤可申候由、被仰付候茂、於御同座主殿殿ゟ被仰渡候

一、家督被仰付候者、宝永七年寅七月朔日、肝付主殿殿ゟ御家老座ニ而、直ニ被仰渡候

但山梔様御隠居被仰渡候茂同日

一、御家久之字拝領之儀、正徳弐年辰六月十一日願申上、同六月廿八日御座之間ニ被召出、御直ニ拝領被仰付候

一、八湖ニ御太刀進上并直馬進上之儀、正徳元年卯九月廿五日、肝付主殿殿ゟ嶋津十郎左衛門御取次ニ而被仰渡候

一、印判ヲ基尼字ニ相改候者、正徳二年辰十一月廿一日、義岡佐平次殿取次ニ而肝付主殿殿江申出古印同人取次ニ而差出候

一、御借銀元利合弐萬六千八百七拾貫目

一、江戸御買掛銀千五拾弐貫目

御家老江戸住衆持の道具

一、馬弐疋　一、奢籠一荷　一、具足箱一荷　一、茶弁当一荷　一、相附挟箱一荷　一、挟箱弐荷（内小附挟箱弐）

一、弓臺弐張　一、対鑓　一、整笠　一、長刀近年減候

一、鉄炮弐挺　一、長總　一、対挟箱

一、玉薬箱壱荷（此弐行大抹消）　一、荻箱（近年被召留候）　一、手道具

右之通被定置、末々之儀者、右ニ準可相減旨被仰出候、

辰六月

一、萬石以上御家老格、御賦主従六拾人

一、播摩路小倉筋御供之御家老供御定

三拾弐人

内吾黨拾人　銭持弐人　簇竿杯壱人

弓臺二而も鉄炮二而も一人　笠杯壱人

具足箱杯壱人

対挟箱杯二人　後押壱人

右外、茶、弁当、長持、挟箱、雨具持者、右之人数内ニ而、勝手次第ニ為杯申通く候、

外ニ駕籠廻り六人

右ハ五月十二日相定候

正徳五年末十二月三日

井上河内守様江被仰出候趣有之、同十二月十二日御申出之通減し候様にと被仰渡候員数

一、進貢料新銀六百四貫目

一、接貢料新銀三百弐貫目

一、吉貴公御ノ御年　一、継豊公已ノ御年

一、元祖信基より久基迄拾九代

一、肥後家者、元祖ゟ二代目信式之四男左衛門尉信清肥後元祖

一、蒲生越前守光清之家を継候者、十二代之忠時二男茂清ニ而候

一、種子嶋権左衛門家者、十二代之忠時三男、出雲守時遠元祖ニ而候

一、太守吉久公之御前者、十五代左衛門尉彈正忠左近将監入道可釣時堯二女ニ而候

一、太守光久公御前、十六代佐近太夫入道一琢久時嫡女、伊勢大隅守貞量室ニ而其息女

一、嫡家代々名、藏人、肥後守、大郎左衛門、四郎右衛門、中務左衛門、左近将監、左衛門尉、

対馬守、左兵衛尉彈正

一、久基　誕生　寛文四年甲辰九月五日癸巳

一、憲時　誕生　元録二年己巳八月朔日

一、時春　誕生　元録四年辛未正月十二日

一、時興　誕生　元録八年乙亥五月廿一日

一、時純　誕生　元録十年丁丑二月七日

一、於信　誕生　宝永三年丙戌正月十日

一、於慶　誕生　宝永四年丁亥二月廿三日

一、重時　誕生　天和元年辛酉六月四日

一、時房　誕生　天和二年壬戌六月廿一日

一、即存　誕生　貞享元年甲子六月十日

金山之事

一、長野山ヶ野金山之基者、鳴津圖書久通御家老職以前ニ、私領邪答院宮之城内佐志村之川中ニ而真砂を取揚候者有之、其真砂をゆりせ候得者、砂金有之候ニ付、此川上ニは金気可有之与存寄候ニ付、為可尋之石見銀山江為罷在内山與左衛門与、肥後國宇土郡半屋喜右衛門を宮之城ニ留置、二三ヶ年之間曽木本城長野迄之山谷川までも経暦させ候之処、寛永十七年三月廿二日、長野内村宮賊谷川中ニ彼與右衛門、金脈石を見附候ゟ土中を掘き候ニ付、圖書為堀出候砂金を持　太守光久公江、御在府之時言上候、夫ニ付猶以可為堀由御諚候ニ付、為堀之候而砂金三百両江戸江被差上被相調候之処、六月廿五日、伊勢兵部貞昌被為召、

猶々為堀進而御□候様にと被仰出候間、段々堀之也、同十八年八月廿八日、砂金九百八拾
両餘被献候、翌拾九年正月十四日、金山と被成給候旨被仰出、奉行北郷佐渡久加、自他國
之人数式萬餘人相集仰渡候、今者在山堀出金不可勝計、道程一里餘、山坂を越大隅桑原郡
横川之内山ヶ野まで、一國に柵を結ひ、其中を堀候、依之薩州長野、隅州之山ヶ野、両國
之坑白仁田与申所に抗水有之事

一、寛永廿年之春天下飢饉、人民困候折節に而、金山堀候儀被差留候旨、被仰出被相止候。然
処に御借銀式万貫目に及、御返済之御手便無之候に付、再金山御免之御願、松平隠岐守様、
神尾備前守様、御取持を以被仰上置候処、明暦二酉申年五月、嶋津市正忠廣、鎌田源左衛
門政有御城江被為召、御免之旨被仰出候処、同年十一月ゟ開闢候。此時より寛文年間まで、
奉行嶋津圖書久道、後に嶋津帯刀久元、新納又左衛門久了、肝付主殿久兼、平田新左衛門
宗正相勤之事

一、芹ヶ野金山之儀、萬治三年頃向見山堀被仰附候由、山先申候、山繁栄之時分凡人数七千人
に及候由申傳候。然処に漸々山衰、至天和式年成に被相畳候御事

一、薩羅金山向見堀、天和三年亥ゟ相始り候、且又芹ヶ野も、元録十一年寅両金山堀之儀被仰
出遂々被召立事に候、是者諸國山堀候様にと公儀仰渡之趣に付、急度被仰付候事
萬治二亥年中
一、玉金四百九拾八貫式百九拾九匁六分　山ヶ野金山
寛永元申年中
一、同　五拾五貫百五拾式匁七分　薩羅金山
同六年丑年中
一、同　拾貫四匁壱分　芹ヶ野金山

唐船漂着之事

一、米百五拾壱俵餘
一、銀拾貫九百九拾目餘
但唐船壱艘七嶋宝嶋へ漂着、長崎へ被差送候入目

右寛永六年丑三月御勘定□ゟ綱帳相調へ異國座へ差出候帳面之表

御城圍録

一、元録九年子四月廿三日之晩八ツ時分、伊知地休右衛門下人清右衛門上行屋、和泉屋町竪山
助右衛門裏屋に罷居候、其家より出火東風烈に而御本丸焼失候、御下屋敷御産所、御厩、

護摩所、諸役座、銀座、出物藏、御普請方無別条候。

一、土屋敷五拾四ヶ所　但家八百五拾六

　　死人老人新網次郎四郎下人

一、町屋敷弐百拾三ヶ所　但家五百五拾五

一、御城御作事、室永三年戌二月十日御取附

一、御城成就地打堅年亥七月四日

一、御家中墓惣目印、上六寸下巾尺横筋鉛筆中目分紙所地色八心次第

　右之通被相定候間、此以後新数墓相調候節者、惣目印相調可申候。尤持合候ゑ新数作替

　申儀ニ而八無之候。

御賦重之事

一、正德二年辰年より四ツ室、銀廿五匁ニ被仰付候。

一、正德六年申年より四ツ室、銀三拾目ニ被仰付候。

一、享保三成年十一月四ツ室、銀六拾目ニ被仰付候。

一、享保六丑二月ゟ新吹銀　弐拾目ニ被仰付候。

一、享保元年申九月十六日　大守吉貴公江戸江御参府之御礼之節　公方吉宗公江御城黒於書院

　久基御目見得、時服三、御太刀銀一枚之馬代進上、御奏者番牧野因幡守英成様、松下薩摩

　守家来程子嶋弾正与御披露支度(有)仕、目長上下。

一、右同日、御老中土屋相模守様、井上河内守様、阿部豊後守様、久世大和守様、戸田山城守

　様、各御年寄、大久保長門守様、大久保佐渡守様、森川出羽守様江、御太刀銀一枚之馬代

　持参ニ而、御目見得之御礼申上候。御留主居阿多六郎右ヱ門殿宗内。

一、武具　馬具　錫　鉛　硫黄　但錫鉛八器ニ作候　銀ゟ不罷成候

　右五品、廻船又者大坂早駄船より江戸江差上ヶ候儀、又者江戸より差下候儀迄御禁止ニ

　而候、承不差越候而不叶節者、願出下田御奉行様被聞召、御免之上差越事ニ候。

一、享保元年申七月より同二年酉八月迄江戸詰并往来道中惣入用之銀之挙

　合八拾八貫八百弐拾三匁四分五厘五毛　但御賦銀外也

　外拾三貫九百廿五匁者、四郎助横四郎同道入目

一、享保二年酉四月五日、鳥井丹波守様御妹於糸様ゟ、御附人奥授人伍久間九右衛門御使ニ而、遵師様御筆御守致拝領候、此御守者先年真修院様江久時様より御進上之由ニ而候、依之被返下之由ニ候、御口上ニ而候、且又象牙之御本尊一躰、右之御守箱ニ入有之候間、是茂致拝領候由ニ而被成下候、

一、享保二年三月十六日芝御屋敷ニ而、将軍宣下為御祝儀、御老中并各御名代等其外段々之御役人様方、御招請ニ而候、彈正事御上客土屋相模守様、御盃被下御有之被下候、

一、同月廿二日、御屋間江被召出此節将軍宣下御祝ニ御用掛被仰附候處、首尾好相済候与御意有之、比志嶋筆人殿より御目録拝領被仰付候由承、平岡八郎太夫殿取次ニ而御目録頂戴仕候、但六枚

江戸ニ而御蒙老供廻り

一、先供五人　一、馬廻四人　一、挟箱弐ツ

手道具壱本　一、笠壱ツ　一、合羽籠　但天気ニより躰減可有之候

一、供押弐人

大口之種子嶋清右衛門殿ゟ宮内弟助殿類系圏覚讃不致候間、書調遣たく大望存候由被申聞、書写致添出、享保四年己亥二月十八日ニ清右衛門嫡子、同氏喜三衛殿二男喜左エ門江相渡候、留者記録方ニ有之候、

一、享保三年戊午七月二日ニ種子嶋拾郎右エ門殿、別立之願申出候處ニ、同八月廿五日願之通別立被仰付、式百八拾石餘之高、願之通ニ十郎右エ門殿高ニ被仰附、家格代々小番ニ被仰付候、北郷作左エ門殿當番直ニ被仰付候、

一、比志嶋筆人殿ニ而御内意申上候者、私二男三男共、相應之縁與共為仕候而者、身代之障ニ被成事ニ御座候、依之存候者、本妻為持申間鋪候、妾ニ而相済可申与存候、就夫ニ存候者、鹿児嶋士之別而小身者之娘ゟ仕候儀者不苦事ニ可有御座哉、此段難究事ニ御座候間、筆人殿ゟ御同意ニ而、御伺被下候之由申置候処ニ、遠貴聞成程可然候。鹿児嶋士之娘妾ニ仕候儀者如何之事ニ候得共、彈正杯者格別之儀ニ候間、不苦苦ニ候。乍然鹿児嶋士之娘者、御内意申上候節可然候。外城衆中之儀者夫ニ茂不及苦候由、御意之趣筆人殿ゟ承候。

一、私三男四男者、未御目見得不仕候、私宅御光儀之節者、御目見得仕候へ共□与願申候而者、

御目見得者仕不申候。私存候者、子共多候得ハ一々御奉公為仕候事者難成、二男之儀ハ御先代御直元服仕候、三男四男之儀者誰ぞ養子共ニ仕候ハヾ遣可申候、左様無之候得者、家来共ニ可仕与存候、然共寛陽院様御孫ニ候得者、私自儘ニ家来ニ仕候儀者、遠慮成御座候間、先御目見得共不為仕召置、孫共之儀者、漸々家来共召成外黒之候与存居候。依之御目見得願候儀者延引仕候、いつ連得与了簡仕漸々者相究可申候、右之了簡ニ而御目見得不奉願事ニ御座候、御目見得仕候而者、最早近々ニ罷成候ゟ其身共ニ而ゞ家来共ニ者難成若候間、先何与なりに召置申候、此旨筆人殿迄御吐申置候由申置候得ハ、被達貴聞了簡次第ニ可仕候被聞召置候由、筆人殿与承候。正徳五年未十二月廿六日

御國道中

享保五年子六月

一、泊　新銀一両　一休　中紙弐束

小倉并中國道中

一、泊　新銀弐両　一休　新銀壱両

東海道

一、泊　新銀弐両　一休　新銀一両

一、新銀弐両ツヽ　御本序見廻之節

箱根権師

伊勢御炊太夫

熱田社人

其外右之者ニ新銀弐両ツヽ

一、椎木庭石其外植物道具之類、廻船より積廻ー不申候様にと、享保五子十二月被仰渡候。

一、享保六年丑六月九日、太守継豊公御家督被仰渡、吉貴公御隠居被仰渡候。

一、同六月廿八日　継豊公御家之御礼之節、公方吉宗公江御白書院ニ而久基御目見得、時服六、御大刀、銀一枚之馬代、御目録進上、御奏者巻三浦壱岐守明敬様御扱露、松平大隅守家来種子嶋殿正与御披露、支度浅黄紺染出し紋帷子下ニ晒着用長上下。

一、同日、御老中井上河内守様、戸田山城守様、水野和泉守様、若御年寄大久保長門守様、大久保佐渡守様、石川近江守様、京都所司代松平伊賀守様江、御太刀、銀一枚馬代、御目

録進上ニ而御禮ニ参り候、御留主居森川利左エ門殿宅内、

船積遠慮之分

一、石年水鉢　一、砂利　一、湯風呂　一、太鞍　一、鞍　一、笛　一、琴　一、三味線

一、春蟹將春蟹　一、双六盤　一、鳥籠之類　一、土附之芝

〆拾弐色

右之品々遠慮被仰付候

船積不苦物之覚

一、塩　一、七輪　一、茶臼

右者去九月九日ニ御用捨被仰渡候

一、のほりかぶと　一、ひな　一、薙鎗刀　一、ほ酒弓　一、数寄屋道具　一、石磨

右之分者表立通に而茂不苦候、其外者吟味之通可被相心得候、

丑十二月

右之通貫五月被仰渡候

一、江戸御留守居被仰付、享保六丑三月十五日、御國罷立同七年寅七月十三日下着

一、享保六丑六月九日　吉貴公御隠居御願之通被仰出　綱豊公江御家督被仰渡候、

一、同月廿八日御家督之御礼被仰上候ニ付御家来九人　吉宗公江御目見被仰付候、久基御目見被仰付候、献上物、御太刀、銀一枚之馬代、時服六、御被盃三浦志岐守明敬様、

一、享保六丑年より同七寅年迄江戸詰入用銀

惣合新吹銀七拾四貫六百五拾五匁五分弐厘一毛二弗（ママ）

内廿四貫九百一匁四分七厘五弗（ママ）　御賦銀

四拾六貫三拾八匁七分一厘三毛八弗　自銀

久基江大御支配之御用係被仰付候事

一、享保七寅九月四日、御城御座之間ニ而綱豊公御直ニ被仰付候、御領國中大御支配被仰付候、御用係被仰付候、奈細者御書附ヲ以被仰渡候由ニ而御直ニ御書付被下候、右御書付左ニ記ス

國中大支配此節可申附候、此儀者　綱州様御家督内ニ被仰附思召茂為有之事候へ共、御隠居被遊候ニ付而、今度右之通申付儀ニ候、依之其方儀右用係申付候條随分精を出し可

相勤候、尤手廣く相揪ル事ニ而急ニ不相済筈ニ候へ共、いつ迚大支配相済様ニ無之候而不叶儀ニ候条、其心得ニ而折角申談可然候、右ニ付而大目附委川藤馬、勘定奉行堀甚左衛門、申付候条萬端可申談候、家老中ニ茂油断無之様にと申聞候条、段々下役等之儀者、見合を以可申附儀ニ候以上

一、享保七寅年被仰渡候御上納米之事

七拾弐萬九千五百斛

内壱萬石ニ付米百石宛之御上米

合米七千弐百九拾五石

御國内御賦

一、主従三拾弐人　御城代

一、乗馬壱疋　萬石以上御家老

右十里外遠方

一、主従弐拾弐人　右同

一、乗馬壱疋

右拾里内近方

外ニ人足并駕籠かき馬より〳〵左之通

一、人足八人　但馬之口引一馬八疋　御城代並萬石以上御家老

一、人足三人　但駕籠かき

一、山廻様御隠居七拾二御年宝永七寅年

一、久基家督四拾七之年宝永七寅年

一、享保七寅年高輪御作事入目金

小判金壱萬四千百五拾七両三部

銀ニ〆八百四拾九貫四百六拾五匁

外ニ銀弐拾九貫四百八拾弐匁

米弐百四拾七石九斗四升

右式行御作事ニ付、御國より被召上候人数、道中船中御賦、并飯米江戸地賦、飯米江戸

江詰居候人数、御普請方江被召仕候人数、足軽人足まて御賦飯米

一、騎馬高持士弐百四人

一、壱萬斛以上五人

一、七千石以上三人

一、五千石以上五人

一、千石以上廿五人

一、五百石以上三拾五人

一、弐百石以上百三拾壱人

郷土資料集 六

「我目分明記」

昭和五十九年三月一日発行

西之表市立図書館